

|||||||  
原著論文  
|||||||

## 推量を表す must に関する一考察

—— 未来時への言及の観点から ——

松本知子

(長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科)

## An Inquiry into the Modal of Certainty “must”:

From the Perspective of Future Time Reference

Tomoko MATSUMOTO

(Dept. of International Tourism, Faculty of Human and Social Studies,  
Nagasaki International University)**Abstract**

This paper aims to investigate the semantic use of the modal auxiliary, “must,” in terms of future time reference. In general, almost every example of the modal of certainty; “must” refers to a present state, very commonly with the verb “be.” Simply put, it seldom occurs with future time reference, because it would almost certainly be interpreted in terms of obligation. It is noteworthy, however, that an epistemic sense is possible where the context makes it more likely, as Ozawa (2014) mentioned. The author explores the idea that there is reference to states or activities in the future even with the modal as long as there are words or a context which can be interpreted in terms of certainty or relate to the present time, contra Sawada (2006). By introducing examples of usages of the modal “must” with the help of English movies, the author identifies the semantic use of “must.” Further, it is argued that the modal can be used in the case that a speaker strongly believes that things will happen or is willing to convince someone to believe what he or she says is bound to happen. The author also shows the functional difference between “must” and a semi-modal “be bound to” in light of the degree of certainty and future time reference in order to support the thesis.

**Key words**

future time reference, present tense, progressive form, certainty

**要 旨**

本稿の目的は、推量を表す助動詞 must について、未来時に対する言及という観点から、その意味的特徴を明らかにすることである。推量の must は、通例、未来の事態に対して言及できないとされている。しかし、小澤 (2014) も指摘しているように、数は少ないとはいえ、未来時に言及している例が存在する。そのような例に対して、澤田 (2006) の主張に反し、確実性もしくは現在との結びつきを示す要素・文脈がある場合、推量の must は未来時に言及できるということを示す。さらに、映画の例を用いて、コミュニケーション的な観点から推量の must を捉えようと、話し手が未来時に事が確実に起こると思込込んでいる、もしくは、確実に起こることをアピールする意味合いがあることが読み取れる。最後に、推量の must の特徴をより明らかにするために、確信の度合いと未来時への言及の観点から、似た意味を持つ表現として挙げられる be bound to~との比較を試みる。

**キーワード**

未来時への言及、現在形、進行形、確実性

はじめに

大西(2014)は、現行の学校教育の中で用いられる標準的な英語の文法説明は数十年前から進んでいないと警鐘を鳴らしている。筆者は現在、一見引き離して考えられがちな英文法指導とコミュニケーション活動を融合させる方法論、つまり、コミュニケーション・スキルと文法力を向上させるための効果的な指導法・活動の研究をしている。その中で、各文法項目が持つ本質を捉え、本や小説、映画の中でそれらがどのように使用されているのかを分析し、コミュニケーションの側面から文法項目を捉え直すことを行っている。

例を挙げると、「～にちがいない」を英語に訳すと must、「～だろう」は will、というように日本語との訳の対一対一で英単語を理解してしまうと、真の意味での英語の感覚を捉えることができない。では、下記の文の must を日本語の「～にちがいない」と同じと捉えると、どのようなことが起きるのか。

- (1) Don't go near that parcel! It {will/\*must} explode.

(澤田 2006: 214)

対一対一で英単語の意味を覚えてしまう弊害として、(1)の例でいうならば、must を用いて非文法的である理由が説明できないことになる。本稿では、推量を表す助動詞 must について、未来時への言及という観点から、その意味的特徴を明らかにする。そして、その特徴をより鮮明にするために、似た意味を持つ表現として挙げられる be bound to～との比較を試みる。

一般に、推量の must は、澤田(2006)に代表されるように、未来の事態に対して言及できないとされているが、下記の例に見られるように、数は少ないとはいえ、未来時に言及している例が存在する。

- (2) a. Something must happen next week.

- b. It must rain tomorrow.

(Palmer 1990: 54)

これらの例について、具体的には、確実性もしくは現在との結びつきを示す要素がある場合、推量の must は未来時に言及できるということを示す。そうでない場合で、(2)のように、未来を表す副詞句と共に起できるのは、確実性もしくは現在との結びつきを示す文脈が存在するか、話し手が確実であると思込んでいる、もしくは、確実であることをアピールする意味合いがあると捉える。そのようなことはまれであるため、推量の must が未来時へ言及できる例も限られることが推察される。

この推量の must と、似た表現として使われる be bound to～との違いは、話し手の確信度が、前者の方が低いことと、後者は未来時への言及も must ほど制限されないことが挙げられる。未来時への言及については、両者の視点が異なるため、生起状況も異なることを述べる。以下、第1節で、推量を表す must の特徴を挙げ、第2節で先行研究を概観し、その問題点を指摘する。第3節で、未来時に言及していると考えられる推量の must について分析する。第4節で、must と、その類似表現の be bound to～について、話し手の確信度と未来時への言及の観点から比較を行い、推量の must の意味的特徴を明らかにする。

1. 推量を表す must の特徴

推量を表す must の特徴についての辞書の記述に辞書間での差はさほど見られない。

単語の持つコア(中核的意味)を中心に単語の意味が整理されている『Eゲイト英和辞典』によると、must のコアは、ある行為や認識に対して、「強制力が働き、そうせざるをえない」こととし、事柄に対する認識の上での強制力であれば「それに違いない」という意になるとしている。そして、must を「確信的な推量」と定義している。

また、*Oxford advanced learner's dictionary of current English (9th ed.)* によると、must は、“Expressing an opinion about something that is logically very likely.” と記載されており、この用法での must は論理的に確信度が高い時に使われると考えられる。

『ジーニアス英和辞典（第5版）』には、確信度の高さについて興味深い言及がある。推量の must は「必然性」を表すとし、「...にちがいない、きっと...だ」と訳されるが、話し手の確信度については、I'm sure で書き換えられるほど強くないと説明している。さらに、推量の must と未来時との関係についての記述もある。それによると、未来に関して「...にちがいない」という時は、must be doing か be bound to を使うのがふつうとしている。そして、文脈が整えば must do の使用を認める人もいるが、避けた方が無難とし、下記の例文を挙げている。

- (3) Look at those clouds: it must surely rain before we get home.  
(あの雲をごらん、家に着く前にきっと雨が降るよ。)  
(南出 (編) 2014: 1393)

これらの辞書による must の記述から、推量の must は話し手の確信度が高い時に用いられ、未来に関して言及する際は、must do の形ではほとんど用いられないということが読み取れる。

## 2. 先行研究

### 2.1 江川 (1991)、澤田 (2006)

江川 (1991) は、(4)の例を用いて、推量の must は、通例、未来の事態を表すことがないため、結びつく動詞は状態動詞に限られるとしている。

- (4) a. There're lights on in their house; they must be home.  
b. Since you've had no food for a whole day, you must be starving.

- c. Her coat isn't here, so she must have gone. (I'm sure she has gone.)  
(江川 1991: 301)

しかし、実際は、(5)の例のように、推量の must と動作動詞が共起している。

- (5) a. He must be getting a fortune.  
b. I thought she must be coming down in a moment. (COCA)

安藤 (2005) は、must が結びつく動詞は江川 (1991) と同様と捉えた上で、must は命題内容が発話時において論理的に真であるにちがいない、という話し手の判断を表す、としている。

さらに、澤田 (2006) は上記のような推量の must が使われる条件を提示している。認識的 must、つまり、ここでいう推量の must は、意識主体が、現時点で入手可能な直接的証拠に基づいて、p に違いないと「断定」することを示すため、未来の状況に言及することはできないとしている。しかし、(6)のような習慣的活動や、(7)のようなスケジュール化された確定的な未来である場合、must は未来を示す副詞句と共起するとしている。

- (6) a. John works for General Electric. [習慣的活動]  
b. John must work for General Electric.  
(7) a. John works for General Electric next year. [確定的な未来]  
b. John must work for General Electric next year.  
(澤田 2006: 260)

さらに、下記の例を挙げ、must+進行形は「手はず」の意味にしかならないとしている。

- (8) Mary must be seeing her boss about it

tomorrow.

(メアリーは明日そのことでボスと会うことにしているに違いない。)

(澤田 (2006: 478))

さらに、Palmer (1990) は、must は発話時において入手可能な証拠や情報に基づいた「唯一の可能性としての結論」を表すとしている。同様に、柏野 (2010) は、must は「(その場で) 観察できる証拠」から推論することを表すとしている。これらの must の特徴からも、澤田 (2006) と同様に、must の現在時制との結びつきの強さが捉えられる。

以上のことから、推量の must は確実性が高いということとその特質から、現在時制の特に状態動詞と完了形と使われることが多いことがわかる。また、澤田 (2006) の論に従うと、推量の must が用いられた多くの例を説明できる。しかし、澤田 (2006) が挙げる must の非未来性条件を仮定した場合、(2) で挙げた推量の must の例を説明できない。(2 a) は「来週は何か起こるにちがいない」、(2 b) は「あす雨が降るにちがいない」という意味を表し、命題内容は未来に属している。つまり、発話時に入手した証拠に基づいてなぜ未来に起こることを推論してはいけないのかが不明である。

また、先述の(6)や(7)のように限られた状況下でのみ、未来を示す副詞句と共に起ると捉えても、その限られた状況に含まれない(2)の例や(9)の例、さらには後述する映画で用いられている未来時に言及している例を説明することもできない。

(9) it is raining and it must rain until the dawn. (安藤 2005: 289)

## 2.2 小澤 (2014)

小澤 (2014) は、下記のような例を提示し、2.1 節で挙げた澤田 (2006) に反し、推量の must が習慣的活動や確定的な未来ではない事

態に用いられることを示している。

(10) a. This research must eventually lead to computer decision-making.

(Sinclair 2011: 277)

b. I was wrong about the meeting being today. It must be happening next Friday. (Hewings 2013: 36)

そして、小澤 (2014) は、このように、推量の must が未来時に言及できるのは、話し手の心的態度を発話に強く反映させたい場合であると分析している。その理由として、must には、下記のように、話し手の存在を前面に押し出す(話し手の心的態度を発話に非常に強く反映する)効果があることを挙げている。

(11) What explosion! I didn't hear any. You must have heard it! The whole town heard it!

(Thomson and Martinet 1986: 147)

また、小澤 (2014) は、最後に、話し手がその事態の発生・成立を確信しているような場合、未来の事態に対しても推量の must が使用されることはあり得るという言葉で締めている。

小澤の分析は、澤田 (2006) では説明しきれない例に加えて、小説で実際に使用されている例も提示し、推量の must の本質にせまった分析をしているといえる。しかし、未来時に言及している例の多くが、進行形が用いられていることに着目していない。進行形は、通例、(12)のように現に進行中の動作を示す用法と近い未来の予定を表す用法がある。

(12) a. We're satelliting live from Berlin.

b. I'm starting on a diet tomorrow.

(江川 1991: 227-228)

江川 (1991: 223) が示すように、(12 b) の用

法は、動作は現に進行中で、その手配や約束ができていているという含みを持つ。つまり、(12b)のような例は、近い未来の予定を示すとはいえども、現在との結びつきが非常に強い表現であることがわかる。したがって、(10b)で、未来を表す副詞句と共起するか否かとは関係なく、推量の must と進行形との相性がいいことが予想される。

また、小澤(2014)がいうところの、話し手の心的態度を発話に強く反映させることがどのようなことなのか、そして、その理由が明らかにされていない。

さらに、小澤(2014)が分析しているように、話し手がその事態の発生・成立を確信しているような場合、未来の事態に対しても推量の must が使用されると捉えられ、多くの例で推量の must が未来時に言及できると捉えられるのではないだろうか。例えば、下記のような例も、話し手が、彼が来ることを確信していれば、推量の意味を持つと捉えられる。

(13) She must come tomorrow.

しかし、実際は、(13)は義務の意味で解釈される。したがって、小澤(2014)の分析に従うと、(2)のような例は非常に稀であるにも関わらず、多くの例で、推量の must が未来時に言及できるということを予想してしまうことになる。

### 3. 提 案

(1)の例をインフォーマントに聞いたところ、下記のようにすれば、推量の must が使えるとの回答を得た。

(14) Don't go near the parcel! It must surely be about to explode.

また、(2b)については、まず使用しないと述べ、下記のように surely があれば容認できるという回答を得た。これは、先述の(3)の例に

共通することである。

(15) It must surely rain tomorrow.

まず、(14)の例については、「近接未来」を表す“be about to~”が使用されている点に着目する。“be about to~”は、通例、未来を表す副詞句を伴わず、now とは共起することから、より差し迫った未来を表すことができる。つまり、現在との結びつきが強い表現であるといえる。したがって、稀ではあるが、推量の must は、surely といった副詞や、be about to といった現在との結びつきが強い表現と共起すれば、未来の事態に使用されると分析する。つまり、推量の must と共起できる未来時は、限定的で、現在との結びつきが強い差し迫った未来であると考えられる。

では、(2a)や(9)のように、確実性を表す要素や現在との結びつきの強さを表す表現が明記されていない場合はどのように説明されるのだろうか。(2a)では、毎日欠かすことなく何か不気味なことが起きていて、週末にこの発言をするといった文脈が必要であり、何かが起こることを話し手が確信している場合、それが確実性を司るといえる。(7)では、今雨が降っている現在の状況が確実性を司る証拠となりえる。

小澤(2014: 90)が述べているように、誰も知りえない未来の出来事とそれ以外の事態は存在しないと「推断する」must は非常に相性が悪いことは間違いない。なぜなら、未来に何が起こるかわからないにもかかわらず、確信めいたことを言うということはリスクが伴うこともあり、好ましいとはいえないためである。

この点に関して、コミュニケーション的な視点で考えてみると、レトリカルな側面が見えてくる。

まさに、グライスの協調の原理を違反して成立する皮肉や機知から笑いが生まれる効果に値するものである。それは、話し手が確実であると思いついでいる、もしくは、確実であることをアピールする意味合いで must が使われると



いうことである。そのような例があってもおかしくないといえる。

以上のことから、推量の *must* は確実性を表す要素や現在との結びつきの強さを表す表現が明記されれば、稀とはいえ、未来時に言及できること、そして、それらが明記されていない場合は、文脈そして、確実性を司る証拠をもとにした話し手の強い確信が背後にあるということがいえる。

#### 4. 分 析

##### 4.1 小澤 (2014) の例

3 節での提案をもとに、小澤 (2014) で挙げられている例について分析する。

まずは、(2 b) については、確実性を司る要素も現在と結びつく要素もないが、(9) のような「今雨が降っている」という文脈や、連日雨が強く降っているという状況、もしくは、明日が雨か晴れかを当てる賭け事をしていて、雨が降ると話し手が確信していることをアピールしたい場合に使われると考える。最後の状況は稀だと思われる。しかし、いずれにせよ、澤田 (2006) のいう「習慣的活動」や「確定的な未来」という言葉だけでは説明できない。

次に、(10 a) については、*eventually* がポイントとなる。*eventually* は『ジーニアス英和辞典 (第 5 版)』によると、「(長い期間・多くの出来事を経て) 結局」と訳され、「ようやく」「やっと」というニュアンスで用いると書かれている。つまり、これまで多くの過程を経て、その結果に至るということを意味するため、完全に現在と引き離された未来時に言及しているのではなく、現在との結びつきを含意していると考えられる。

次に、(10 b) については、話し手は会議が今日あると間違えており、来週の金曜日に必ずあるという確信を述べているか、自分の間違いを取り繕うために、確信度が高いことをアピールしているかと捉えられる。

最後に、小澤 (2014) が挙げている下記の本

の一節は、トーナメント開催の掲示を見ている生徒の文言から、そのトーナメントの代表者の一人にセドリック・ディゴリーがこれからならう、登録しようとしているのだと主人公のハリーが結論付けている場面である。

(16)

[Triwizard Tournament (三大魔法学校対抗試合) という大会が 1 週間後に開催されるという掲示を群衆が見ている]

“Only a week away !” said Ernie Macmillan of Hufflepuff, emerging from the crowd, his eyes gleaming.” I wonder if Cedric knows? Think I’ll go and tell him. . .” “Cedric?” said Ron blankly as Ernie hurried off.” “Diggory” said Harry. “He *must be entering* the tournament.” “That idiot, Hogwarts champion?” said Ron as they pushed their way through the chattering crowd toward the staircase.

(J. K. Rowling, *Harry Potter and the Goblet of Fire*)

この場面では、トーナメントに登録するのは未来のことであると捉えられるため、小澤 (2014) も指摘しているとおり、澤田 (2006) の反例になると考えられる。しかし、ここで着目すべきことは、進行形が使われている点とハリーの心理である。近い未来のことを伝えるとはいえ、進行形は、先述したように、現在との結びつきが強い表現であるため、澤田 (2006) の *must* が使われる状況である、現時点で入手可能な直接的証拠に基づいて、*p* に違いないと「断定」する説明と合う。次に、ハリーの心理については、確信に満ちすぎているくらいの自信満々の心境で *must* を使って表現していることが映画の場面を見ても明らかである。また、ロンの返しからも明らかである。したがって、ハリーにはセドリック・ディゴリーが登録しようとしていることに強い確信があり、また、それを露呈したことで、ロンはとまどっているのである。

以上のことから、小澤 (2014) が挙げている、推量の must が未来の事態に使用されている例に関して、確実性もしくは現在と結びつく要素が存在しているため、容認されていると分析できる。

#### 4.2 映画での例

さらに、推量の must が映画で用いられている例で、未来時に言及しているものと捉えられる例を挙げる。

(17)

ANDY: Hold on. Hello? Miranda, hi. I'm trying to get you a flight, but no one is flying out because of the weather.  
MIRANDA: Please. It's just, I don't know, drizzling. -[Thunderclap] -Well, someone must be getting out. Call Donatella. Get her jet. Call everybody else that we know that has a jet. Irv? This is your responsibility. This is your job. Get me home.  
(Devil Wears Prada 2006 <00:29:54>)

(17)は、『プラダを着た悪魔』の中で、鬼編集長と称されるミランダとその部下アンディとの会話の場面である。仕事でマイアミに行っているミランダが、嵐の中飛ぶはずのないニューヨーク行きの飛行機の手配をアンディに頼んでいる場面である。ミランダは娘の学校行事があるために、なんとしてもニューヨークに戻りたいと思っている。ここでの must は、未来の事態に使用されていると考えられる。下線部は、「誰かは出ているに違いないわ」と解釈されるが、これから飛行機が飛ぶという状況であることと、ミランダの強気な発言の様子から、現在の状況を踏まえ、これから出る状況になるに違いないという強気な発言と捉えられる。このように捉えることで、次の発言である、「ドナテッラに電話しなさい。彼女の飛行機を手配しなさい。」という発言にスムーズにつながると考える。こ

こでのミランダの発言は、誰か飛行機出せるでしょ、という発言なのである。そして、確実性をアピールすることで、飛行機の手配ができなかったらどうなるかわかっているわよね? というニュアンスすら感じさせるほど脅威的な発言である。この例からも、確実性を話し手がアピールしていることが場面から読み取れる。

さらに、『イヴの総て』の中に、興味深い例が存在する。

(18)

EVE: Erasmus Hall. That's in Brooklyn, isn't it?  
PHOEBE: Lots of actresses come from Brooklyn. Barbara Stanwyck and Susan Hayward. Of course, they're just movie stars. You're going to Hollywood, aren't you?  
EVE: Ah, hmm.  
PHOEBE: From the trunks you're packing, you must be going to stay a long time.  
EVE: I might.  
PHOEBE: That spilled drink's gonna ruin your carpet.  
EVE: Maid'll fix it in the morning.  
(All About Eve 1950 <02:13:41>)

この場面は、演劇ファンからトップ女優になったイヴと、イヴに憧れる女子学生のフィービーとのやり取りである。イヴがパーティーから自宅に戻ると、見知らぬ女子学生フィービーがソファで眠っており、警察に通報しようとした後の会話である。

ここでは、推量の must と “be going to~” が共起し、長くハリウッドに滞在するという未来の事態に言及している。“be going to~” は、江川 (1991: 220) にあるように、日本語の「~するつもりです」に相当し、その場で思い立ったことではなく、前から考えていた意図・計画などを表す。前から考えていたという視点が完

全なる未来時への言及とは捉えられない点、つまり、現在、過去と関係づけられる点が読み取れる。また、荷物が多いという現在の状況から、長く滞在することの現実性の強さが読み取れる。

この例からも、現実性を司る要素、もしくは、現在との結びつく要素が、推量の *must* が未来時に言及する際に必要であることがわかる。

#### 4.3 *must* / *be bound to* ~

最後に、推量の *must* と類似した表現である *be bound to* ~ との違いを現実性と未来時に対する言及の観点から考察する。

まず、“*be bound to* ~” の辞書の記述を調べてみると、『ロングマン現代英英辞典 (第6版)』には、“*to be very likely to do or feel a particular thing*” と定義されており、*Cambridge Academic Content Dictionary (1st ed.)* には、“*certainly or extremely likely to happen*” という記述がある。*very* や *extremely* という副詞があることから、確信の度合いがかなり高い時に使う表現であることがわかる。

推量の *must* の『ロングマン現代英英辞典 (第6版)』による定義は “*used to show that something is very likely, probable, or certain to be true*” であり、*probable* と *certain to be true* という文言以外は、*be bound to* ~ との違いはない。この点に関して、Palmer (1990) は、下記の例を挙げ、*be bound to* ~ の方が *must* よりも話し手の確信の度合いが高いと述べている。『ジーニアス英和辞典 (第5版)』にも同様の記載がある。

(9) a. John's bound to be in his office.

b. John must be in his office.

(Palmer 1990: 55)

“*be bound to* ~” は “*It is certain that...*” と書き換えられ、*must* については、“*there is a likelihood that the speaker is drawing the most obvious conclusion*” という文言を使って

説明している。つまり、“*be bound to* ~” は確かであるのに対して、*must* は、話し手が一番ありえる推論をしている可能性があるという文言からも現実性の高さが *must* の方が少し低いことがわかる。

では、現実性が高い “*be bound to* ~” は未来時に言及できるのかという疑問が生じる。本来なら、現実性の高さとは不確定要素が多い未来概念とは合わないはずであるが、実際は、下記の例からわかるとおり、“*be bound to* ~” は未来の事態に使用することができる。

(20) a. If the government deals with the situation realistically, the cost is bound to be great.

(Palmer 1990: 56)

b. Your plan is bound to succeed.

(田中・武田・川出 2006: 189)

Palmer (1990: 56) は、“*be bound to* ~” が未来時に言及される際は、不可避の意味を持つと分析している。そして、「~しなければならない」という意味すら持つとしている。

また、(20 b) に代表される “*be bound to* ~” の多くの例から、未来に対する確信を述べていると考えられる。したがって、推量の *must* と “*be bound to* ~” は視点が異なることになる。前者は、発話時において入手可能な証拠から推論するため、現在に視点が置かれるのに対して、後者は、未来に視点が置かれているといえる。それは、不定詞の *to* が含意している未来志向性とも一致する。

以上のことから、“*be bound to* ~” は、推量の *must* よりも現実性が高いこと、そして、その特徴から、未来時への言及に関しては、必ず起こる、もしくは、そういうものだという不可避の意味、つまり、避けられない状況を意図するがゆえに、未来で用いられても問題がないと分析できる。また、“*be bound to* ~” は *must* とは違い、未来に視点が置かれていることから、

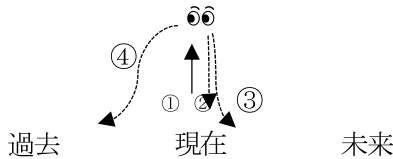


未来時に問題なく言及できるともいえる。

#### 4.4 推量の must の視点

未来時への言及という視点から推量の must の意味的特徴として明らかになった点を図示すると下記ようになる。

(2)



①の矢印は、発話時（現在）に入手可能な証拠や情報が入ってくることを意味している。そして、その証拠に基づいてこうに違いないと断定することを②の矢印が示している。多くの例で、推量の must は①があって、②の視点から文が発せられる。その一方、③は、本論文で考察した内容で、未来時に使用される must の視点を示している。現在との結びつきの強さを示すとともに、少し先の未来も含意していることを表す。④は、must+have+完了形が用いられる場合の視点を表す。

#### 5. おわりに

本稿では、通例、未来の事態には使用されないとされる推量の must について、確実性もしくは現在との結びつきを示す要素がある場合、未来時に言及できるということを示した。そのような要素がなく、未来を表す副詞句と共起できる例については、確実性もしくは現在との結びつきを示す文脈が存在するか、話し手が確実であると思込んでいる、もしくは、確実であることをアピールする意味合いがあると分析した。そのようなことは日常生活ではあまりないため、推量の must が未来時へ言及できる例も限られると考えられる。

この推量の must と、似た表現として挙げられる“be bound to~”との違いは、話し手の確

信の度合いが“be bound to~”の方が高く、“be bound to~”は must とは違って視点が未来に向けられていることを述べた。

今後の課題として、まず、推量の must と“be bound to~”との共通点と差異から、それぞれの本質を明らかにすることが挙げられる。また、なぜ推量の must が未来時と相性がよくないのかについて、日本語の「～にちがいない」との差異を探り、明らかにしていくことも挙げられる。日本語の場合、英語とはちがって「明日彼は来るにちがいない」というように、未来時でも問題なく使用されるためである。今後、それぞれの言葉に含まれた本質を探り、助動詞の持つ微細なニュアンスや使い方の研究を通して、語法研究への寄与、さらには、英語教育へ還元に向けていく所存である。

#### 付 記

本論文は、2017年6月25日に行われた日本英語表現学会第46回全国大会における口頭発表に加筆、修正を加えたものである。

#### 参考文献

- 安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』東京：開拓社.  
Cambridge academic content dictionary. (1st ed.).  
Retrieved from <https://dictionary.cambridge.org/>  
Davies, Mark. The Corpus of Contemporary American English (COCA).  
江川泰一郎 (1991) 『英文法解説 (改訂三版)』東京：金子書房.  
Hewings, Martin (2013) *Advanced Grammar in Use* (3rd ed.) Cambridge: Cambridge University Press.  
J. K. Rowling (2000) *Harry Potter and the Goblet of Fire*. United States: Arthur a Levine.  
柏野健次 (2010) 『英語語法レファレンス』東京：三省堂.  
*Longman Dictionary of Contemporary English*. (6th ed.)  
Retrieved from <https://www.ldoceonline.com/>  
南出康世 (編) (2014) 『ジーニアス英和辞典 第5版』, 東京：大修館書店.  
小澤賢司 (2014) 「推量を表す will と must をめぐって」『英文学論叢』第62巻, 85-98頁.  
大西泰斗 (2014) 「文法指導の勘所」『英語教育』大

- 修館書店, 第63巻第9号, 10-12頁.
- Oxford advanced learner's dictionary of current English* (9th ed.) (2015) London: Oxford University Press.
- Palmer, Frank Robert (1990) *Modality and the English Modals*: 2nd ed. London: Longman.
- 澤田治美 (2006) 『モダリティ』東京: 開拓社.
- Sinclair, John (2011) *Collins COBUILD English Grammar* (3rd ed.) Glasgow: HarperCollins Publishers.
- 田中茂範・武田修一・川出才紀編 (2003) 『Eゲイト英和辞典』(株)ベネッセコーポレーション.
- Thomson Audrey Jean and Agnes V. Martinet (1986) *A Practical English Grammar* (4th ed.) Oxford: Oxford University Press. DVD
- Darryl F. Zanuck. (Producer), & Joseph L. Mankiewicz. (Director). (1967). *All About Eve* [Motion Picture] United States: 20th Century Fox.
- Wendy, F. (Producer), & David, F. (Director). (2013). *The Devil Wears Prada* [Motion Picture]. United States: 20th Century Fox.